

①城館史研究における「会所」の考古学的研究

脱領域的な文化史（考古学・建築史・庭園史・文芸史・宗教史・政治史）。
研究史の概観を知りたい。小野正敏氏の仕事¹⁾。それ以降停滞か。

②「月」というテーマ新しい文化史研究の方向を示す。

感想

「会所」はいわゆる書院造りの原型となったとされるが、武家文化における寄合の場、遊興のみでなく、武家の執務・合議施設として文化史上重要な位置をもつといわれる（村井康彦『武家文化と同朋衆』）。足利時代の文化論の原点に位置する問題。会所は人工的な自然景観としての庭（そして借景としての自然それ自体）と一対の人の寄り合う施設であって、都市的な施設の典型といえる。都市の夜の時間の公共化・貴族化の象徴といえるだろうか（鎌倉期の前提はあるか）²⁾。

鈴木報告はその最大の借景として「月」の位置を指摘した。私見では支配層の文化は庶民（早寝早起きの庶民とは違って）日常的に夜を享樂する文化（よくいえば夜の清澄を尊ぶ文化）であった。鈴木が依拠したのは陳馳「待月にみるありあけの月」であるが、私見は神話時代については「宝姫女帝（皇極＝齊明）の母子王朝」（小路田泰直編『私の天皇論』東京堂出版、二〇二〇）、奈良時代については『かぐや姫と王権神話』（洋泉社新書）で若干のことを述べた。その意味で日本では常に月の文化であった。この会所の月は南北朝期以降の武家が「武家貴族」として「平安の公家貴族」と同様に「月の享樂」の文化に到達したことを意味するのであろうか。月の文化の通史を構想する上で意味が大きい。

論点

①「月のよくみえない会所」。テータでは四割見えないことをどう考えるか。

月が特定の窓から特定の日時だけはみえるということはないか。

庭からはみえる場合があるか。庭に四阿があるか。

会所での点茶の後に庭で逍遙することは多かつたらう。

立地・借景の関係で月が見にくいことがあるか。

「右此の一巻は、武蔵国角田河原近きあたりにしばしば宿ること侍りにしに、三月の下弦の比、宵過ぐる程の物語など仕りに今夜は大方の人だに月待ちなど申す物を、山の端近き愁ひをも言はずしてはいかでかなど語りし次いでに」（宗祇「吾妻問答」）。

②能における月一一月への意識

猿楽は当初その舞台は演能のつとに仮設され、観客は会所の縁先から見るのが普通で、雨天の場合は座敷の畳をとりはらって舞台とすることもあったという。たとえば世阿弥の「井筒」は『伊勢物語』の「筒井筒」にもとづいて作られた悲恋の能であるが、東から出て大竜田山に沈む奈良の月に女が乗り移るような筋立てになっている。その他、夢幻能には必ず月がでてきてそれによって救われる、大団円になるという話が多い。能における「月」という論文があることを知らないが、会所の芸能としては注意すべきものと思う。建築史としては仮設舞台の問題でもある。

③八月一五日の意味——「新年」の意識？

八月一五日、九月一三日の月見については年中行事＝年間暦の中で位置づけたい。「中世史」（文献）では、算用帳に一年の〆が七月になるという例があり、八月から始まる一年の存在が主張されている（木村茂光「中世農村と盂蘭盆」『日本古代中世畠作史の研究』）。これは（普通は夏月、四・五・六月が農月とされるが）、畑作・養蚕やその収納を入れると、五・六・七月が農月として地域は多忙という点に根拠が求められている。七月末に最初の稲刈りが始まるのが通例でもある。

それらを終えた八月が「新年」となる。八月は主従関係を表現する八朔の貢上の月でもあり、八月一五日の月見は（この意味での）「年始」の儀礼であった可能性がある。

④千々和到「板碑とその時代」

鈴木報告によって「月の文化」を論ずる定点を固めることがかろうとなるように思われる。「中世史学」（文献）では千々和到「板碑とその時代」（平凡社選書）、とくに七章「結衆の時代」、八章「月待に見る都鄙の交流」の位置が大きい。一五日・二三日を日付とする板碑がきわめて多く、これは当然に月に関係する。領主城館での状況の確認を進めると同時に、それによって民衆史・村落史を見なおしていきたい。なお千々和の仕事は東国を拠点としているが、都鄙交流の論もあり、問題を一般化していく上で意味が多い。